
本の虫～春の図書館～

姫林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本の中々春の図書館

【Nコード】

N5056C

【作者名】

* 姫林檎 *

【あらすじ】

高校生になった春本の虫な私が見つけたのは学校の図書館だった。その本達はみんな見覚えのある本達。だけどその中で1冊だけ知らない本があった・・・。

（前書き）

一応これは短編ですが、続きを考えていたりします。

ですが、かなり自信のない小説なのでこれつきりとも考えています。

続きを期待せず読んだほうがいいと思います。

読みたいという方は是非コメントください！！

本を読んでもただじゃ　こんな想い　することなかった。

幼稚園児の頃、ランドセルをする小学生が大人に見えた。

小学生の頃、制服を着てきちんとした髪型をする中学生が大人に見えた。

中学生の頃、義務教育を終えて自分の道を自分で決めて生きる高校生が大人に見えた。

幼稚園子の頃、高校生なんて存在すら知らなかった。

小学生の頃、高校生なんて『遠い未来の自分』だった。

中学生の頃、高校生なんて『なれたらいいなという感じの自分』だった。

私は今　高校生だ。

だけど今　幼稚園の頃　小学生の頃　中学生の頃

どれを思い出しても『少し前の自分』であつたりする。

とはいえ、幼稚園の頃なんてほとんど覚えてないけど。

本ばかり読んでいた中学時代。

今 私の片手には高校の指定かばんがある。

その中には やっぱり本があつた。

こういう中学生や高校生 学年に1人や2人、いるんじゃないかな。

へたしたらクラスに1人2人は。

私は本が大好きで、本がすべてだった。

恋のときめきだって、友情の感動だって、本を読んでいれば味わえると思つてた。

だから現実の恋も友情も 魅力がなかった。

だって 現実には傷つくことばかりだと思つていたから。

失恋 絶望 嫉妬 裏切り 虐め e t c . . .

そんな私も、高校生になった。

当然 そろそろ悩むものがあつた。

「ねえ、春ちゃんは彼氏つくらないの？」

幼馴染のよっちゃんが言う。

私の名前は春子。で、春ちゃん。

彼女の名前は良子。で、よっちゃん。

「そういうよっちゃんは？」

「言ったじゃん。いるよ」

「ああ・・・金沢君、だっけ」

「うん！」

幸せそうに笑うよっちゃん。

まあ、彼氏ができたからっていつまでもこっぴどい表情ができるとは限らないよね。

私はよっちゃんに気づかれないよう苦笑した。

「春ちゃんもさ、もう高校生なんだからそういうのに興味を示そうよ！」

「うーん、そういう気になればいいんだけど・・・あ、ごめんよっちゃん！私、図書室行く！」

「へ？」

「この学校の図書室、まだ行ってないんだ！」

私はそういうと、よっちゃんに手を振って走り出した。

私は今、恋愛なんかよりも大事なものがある。

彼氏なんかよりも、欲しいものがある。

それって、悪いこと？

図書室に入ると、オレンジのにおいがした。

さわやかで甘いオレンジのにおい。

私はそれをあまり気にせず、本棚へ近寄った。

だけどそこには、中学の図書室や図書館で読んだことのある本ばかりがあった。

ため息をつくと、1番下の段の本で目がとまった。

そこには聞いたことのない題名の本があった。

『鋭くて柔らかいナイフ』

眉間にしわを寄せ、その本を手にとる。

表紙をめくると、オレンジのにおいがした。

振り向くと、そこには男の子がたっていた。

「1年生？」

「は・・・い」

「そつかー入学式の翌々日に図書室なんて、本が好きなんだね」

ああ この人だ。

オレンジのにおい。

「あの・・・飴、舐めてます？」

「え？」

「オレンジ・・・」

「ああ、ごめん！もしかして嫌い？」

「い、いえ・・・」

男の子は『よかった』と微笑むと私の持っていた本を見て苦笑した。

「その本、読むの？」

「え？」

「いや、読んじゃいけないとかじゃないよ？」

「あの・・・聞いたことのない・・・題名だったんで。」

「そりゃ聞いたことないに決まってるよ。」

「え？」

「だってそれ、俺が書いたんだもん。」

「・・・へ？」

男の子はにつこりと笑うと、私の手を握り無理矢理開かせるとポケットを探った。

それからオレンジの飴を私の手の上に置いた。

「どーぞ。」

「あ・・・どうも・・・」

「感想聞かせてね」

「は、はい・・・」

返事をして、私は本をかりて 図書室を出た。

心臓がうるさい。

大丈夫 これは、久しぶりに初対面の人と話したから！

あ

私はあることを思い出した。

「学年も・・・組も・・・^{クラス}名前も聞いてない」

私は大きくため息をついて、本を握り締めた。

気づいた時にはもう遅くて、私はよっちゃんの自転車に2人乗りしていた。

まだ道路に桜の花びらのじゅうたんのある

ぼんやりとしたあたたかい春のことでした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5056c/>

本の虫～春の図書館～

2011年1月5日05時57分発行